



「ほめる」と「認める」

帯西では、子供たちが「めあて」を決め、そのめあてに向かって実践し、振り返ることを大切にしています。振り返りを仲間と共有することで、子供たちには成長の実感を味わわせ、「自己有用感」を醸成することを狙っています。この自己有用感ですが、「誰かの役に立った、誰かに喜んでもらえた」など、相手の存在なしには生まれてこない感情なのです。この自己有用感を育てるために最も効果的なのは、「認める」という行為です。



よく子供を「ほめましょう」と言いますが、実は「ほめる」という行為の意味を理解しないと、効果が表れないことがあります。この「ほめる」という行為は、ほめる(自分)側に基準があり、自分の基準以上だとほめ、自分の基準以下だと叱責に繋がるのです。一方で、「認める」という行為は、認められる(相手)側に基準があります。「当番活動を率先して頑張ってくれたね。」「雑巾をそっと掛けてくれたね。」「お風呂洗いしてくれて助かったよ。」または、相手の目標やめあてに対する頑張り度など相手の具体的な姿を認めるのです。

自己有用感とは、人が生きていく上で、決して揺らぐことのない基盤となるものです。自己有用感が高い子供たちの特徴として、「自分に自信がある」「思いやりのある行動ができる」「友達と協力できる」「学習意欲が高い」「自主的・自律的な生活ができる」など、これからの社会に求められる「非認知能力」がたくさん身に付いています。だからこそ帯西では、「心のパズル」を子供たちが互いに同じ基準で認め合うことのできる評価指標の一つとして活用しています。お子さんの自己有用感を伸ばすために、ご家庭でも「子供の話をじっくり聴く」「家事を分担し、責任を果たさせ、達成感を味わわせる」「子供のよい面を認める」などすぐにでも取り組むことができます。子供たちの自己有用感を、学校・家庭で共に育てていきましょう！

SLIM の成功！

宇宙航空研究開発機構(JAXA)の月着陸機「SLIM(スリム)」が20日未明、月面着陸成功したことは報道等でご存知の方もいらっしゃると思います。月面着陸は、旧ソビエト連邦、アメリカ、中国、インドに次いで5カ国目ですが、スリムが目指したのは、「ピンポイント着陸」でした。これは、これまでどの国も成しえなかったことで、世界中から注目を浴びています。これまでの月面着陸は、数キロ四方のどこか安全な場所に着陸する「降りられる場所に降りる」というものでしたが、スリムは狙った場所の半径100m以内に着陸する「降りたい場所に降りる」というとても精度の高い月面着陸でした。宇宙開発には、科学的技術の向上が期待でき、それに伴い経済的効果や雇用の増大など好循環が生まれます。さらに、携帯電話などの社会インフラの提供に貢献できるそうです。少し出遅れた感のある日本の宇宙開発ですが、今回の着陸成功は、大きな宇宙開発の転換期でもあると思いました。

